

3. まとめ

本章においては、研究報告書（1章から7章）における分析データの傾向を全国データとの比較によって明らかにした。

これらの結果より、分析データにおいては全国データと比較し、性別の構成割合に差異は見られなかったものの、分析データのほうが年齢階層が低い集団が多く、それは女性に顕著に表れていた。

また要介護度については、分析データにおいては全国データと比較し、要介護1が顕著に多く、その一方で要介護4・5といった要介護度が高い集団が少なかった。さらに年齢階層別の要介護度の構成割合については大差は見られなかったが、男女別にみると女性に軽度高齢者群がより多い傾向が示され、これらの集団が分析データにより多く占めている傾向が明らかになった。

第2章 経年的観察を行った要介護高齢者の性別・年齢別にみた心身状態に関する基礎的分析結果

本章においては、分析データとなった経年的観察を行った要介護高齢者の性別・年齢別・状態別にみた健康状態の特徴について分析を行った。

1. 要介護認定等基準時間

1) 調査対象者全体

調査対象の要介護認定基準時間は、1回目 49.03分から、2回目の 49.10分と 0.7分長くなっていたが、ほとんど変化はなく、統計的有意差も見られなかった。しかし、2回から3回目は 54.09分と約 5分増加し、その変化が大きく、同様に4回目も 59.42分となり、3回目に比較すると約 5分は長くなっていることから、認定回数が増加するにしたがって、基準時間が長くなる傾向とその変化時間も長くなる傾向があった。

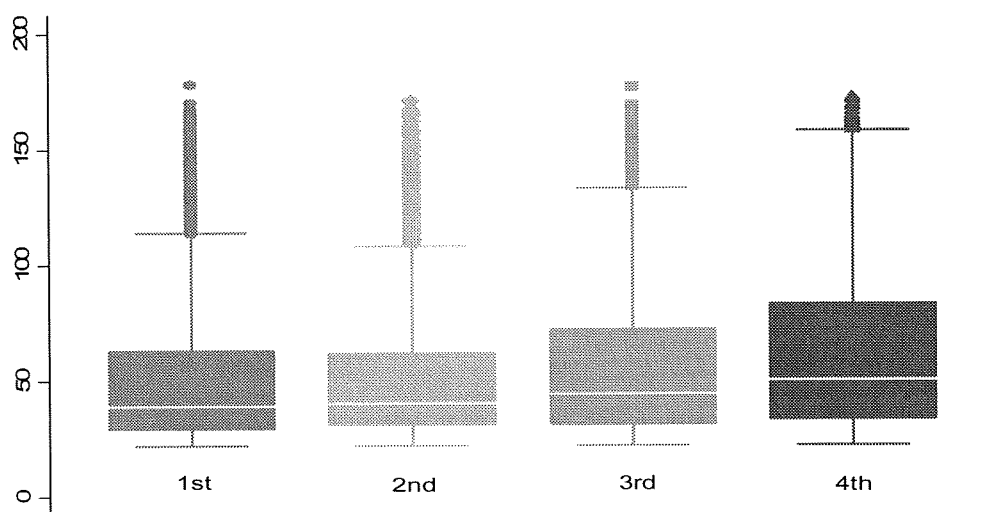


図 2-1 要介護認定等基準時間の推移 (ボックスチャート)

2) 男女別

調査対象の男女別に要介護認定基準時間を分析した結果は、男性と女性では、男性のほうが要介護認定基準時間は、すべての認定時点において、男性のほうが女性よりも長かった。男女別の経年的変化については、男性1回目 53.27分から、2回目の 52.83分とわずかではあるが、0.44分だけ時間が短くなっていた。しかし、女性は、0.3分長くなっており、男女の経年的変化の傾向には違いがあった。

2回目から3回目の変化は、男性は5.34分増加し52.83分、女性は、4.83分増加し52.26分となり、その変化は大きくなっていった。同様に4回目も男性64.31分、女性57.23分となり、3回目と比較すると男性6.14分、女性4.97分と長くなっていることから、認定回数が2回目以降は、男女共に基準時間が長くなる傾向とその変化する増加時間も長くなる傾向があった。

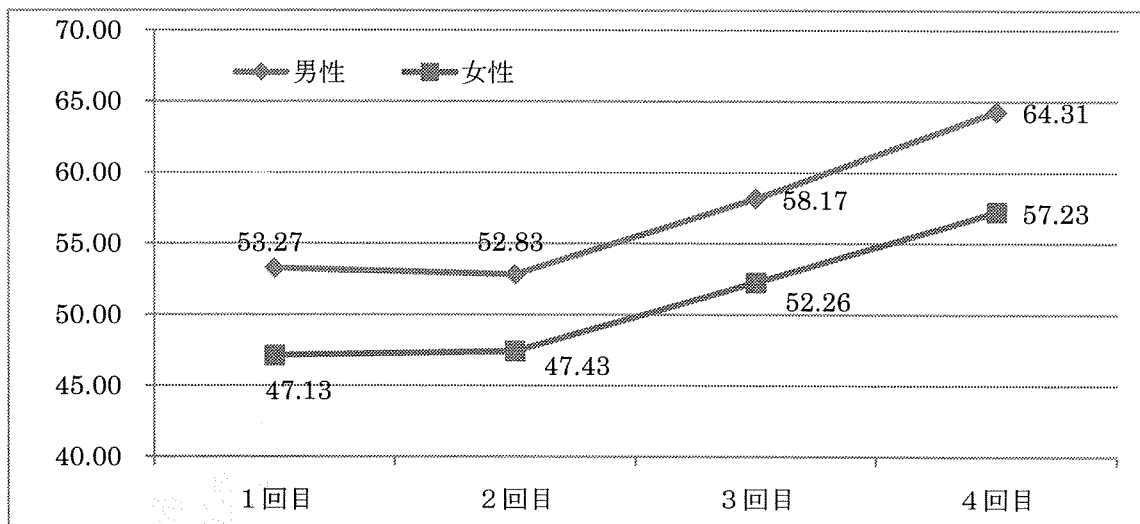


図 2-2 男女別の要介護認定等基準時間の経年的な変化

3) 年齢階層別

年齢階層別に要介護高齢者における要介護認定基準時間を比較した結果、65歳未満、65歳以上75歳未満については、1回目から2回目にかけて要介護認定基準時間が有意に低下した。しかし、それ以上の年齢階層については、95歳以上を除き有意に上昇していた。2回目以降の認定基準時間については、いずれも回を重ねるごとに長くなる傾向が示された。

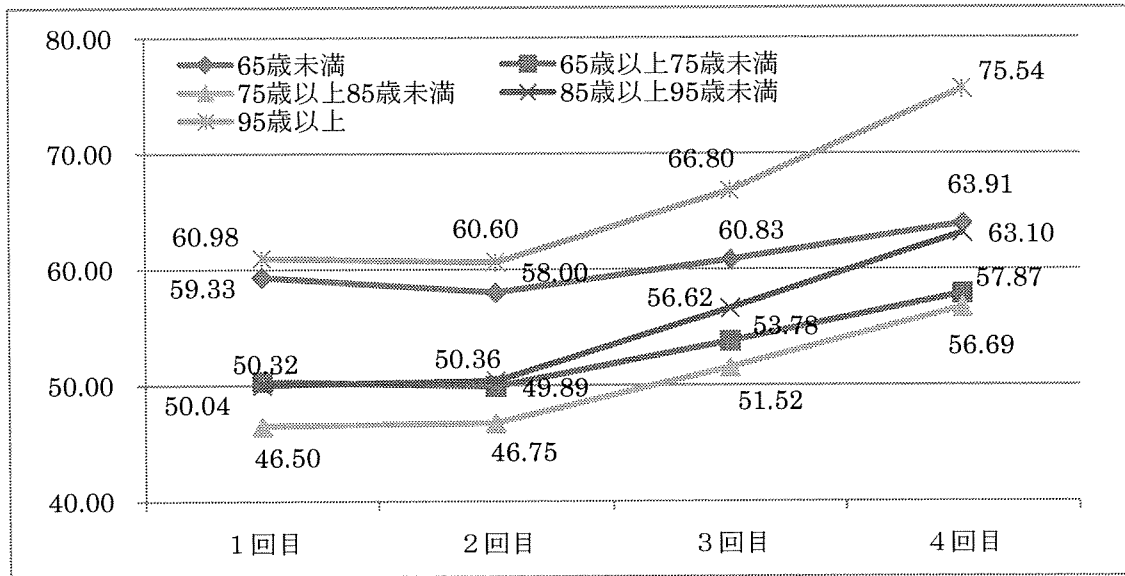


図 2-3 年齢階層別の要介護認定等基準時間の経年的な変化

4) 男女別年齢階層別

① 男性

男女別年齢階層別に要介護高齢者における要介護認定基準時間を比較した結果、男性においては年齢階層別にみると、1回目から2回目にかけては、65歳未満では、1回目 62.75点から2回目 60.38点、65歳以上75歳未満では56.31分から55.29分と有意に時間が低下していたが、75歳以上については、有意差はなかった。

また、2回目以降については、いずれの年齢階層についても認定回数が増えるにしたがって、有意に時間は増加していた。

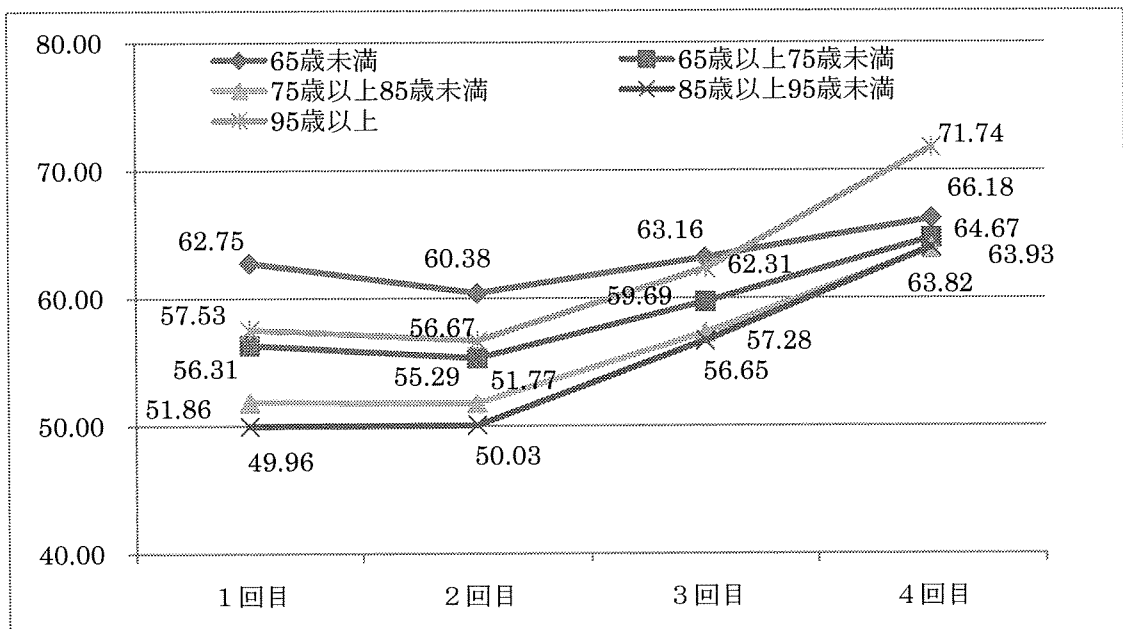


図 2-4 男性の年齢階層別要介護認定等基準時間の経年的な変化

② 女性

女性においては年齢階層別では、1回目から2回目にかけては、75歳以上85歳未満では、1回目44.38点から2回目44.77点、85歳以上95歳未満では50.06分から50.47分と有意に時間が長くなっていったが、その他の群では有意差はなかった。

また、2回目以降については、いずれの年齢階層についても回数が増えるごとに有意に時間が増加していた。

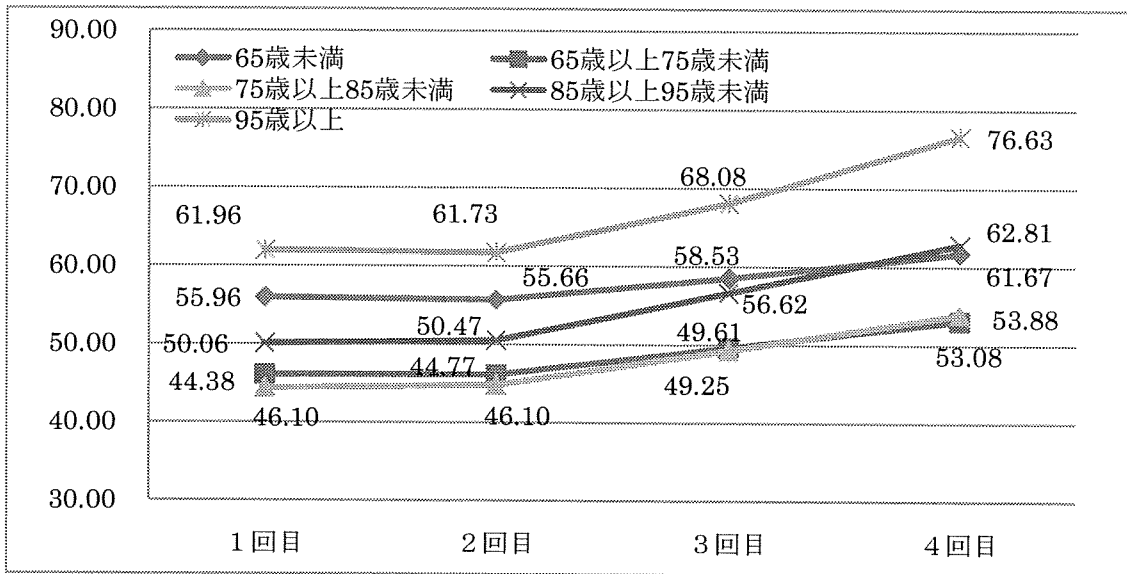


図 2-5 女性の年齢階層別要介護認定等基準時間の経年的な変化

第1群（麻痺・拘縮等）の中間評価項目得点の経年的変化

1) 調査対象者全体の経年的変化

要介護高齢者における第1群（麻痺・拘縮等）の中間評価項目得点は、1回目 84.10点、2回目 82.43点、3回目 80.52点、4回目 78.18点と回数を経るごとに得点が有意に低下する傾向があり、いわゆる状態が悪くなる傾向が示されたが、変動係数も回数が増加するほど大きくなっていった。

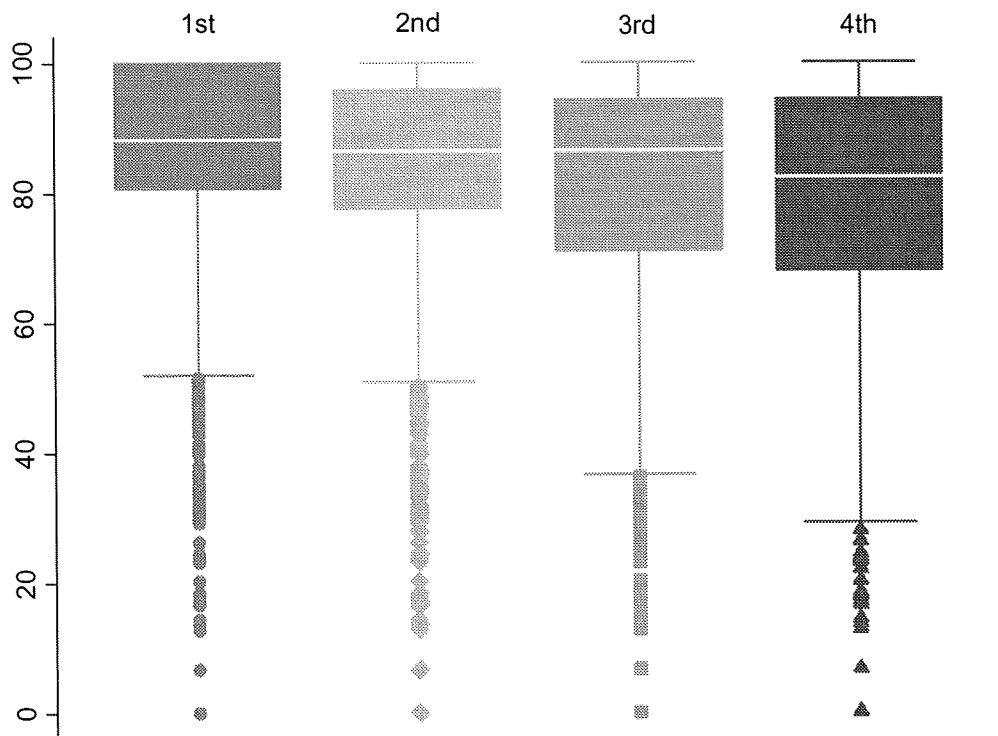


図 2-6 第1群（麻痺・拘縮等）の中間評価項目得点の推移（ボックスチャート）

2) 男女別

男女別に要介護高齢者における第1群（麻痺・拘縮等）の中間評価項目得点を比較した結果、すべての年齢階層において1回目から4回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

また、すべての認定回数時点で女性の得点が男性の得点よりも有意に高かった。

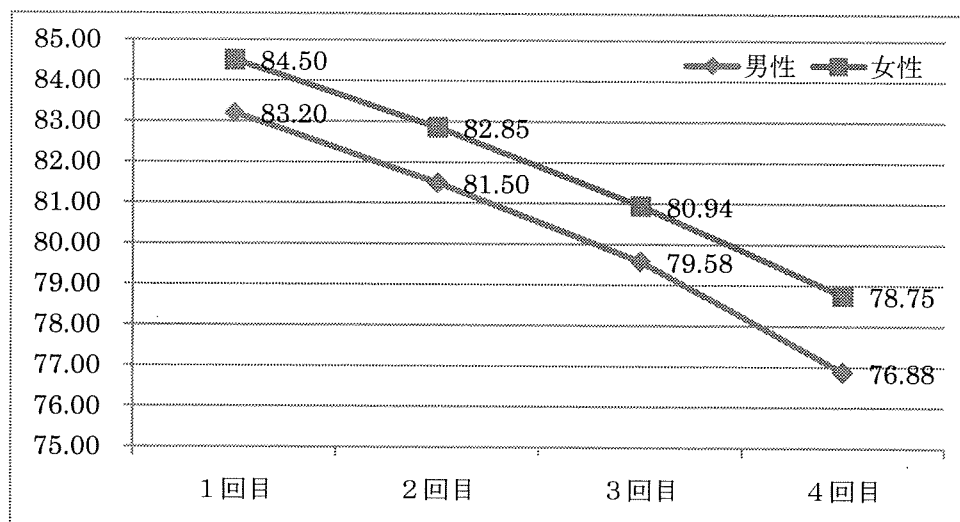


図 2-7 男女別の第1群(麻痺・拘縮等)の中間評価項目得点の経年的変化

3) 年齢階層別

年齢階層別に要介護高齢者における第1群（麻痺・拘縮等）の中間評価項目得点を比較した結果、すべての年齢階層において1回目から4回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

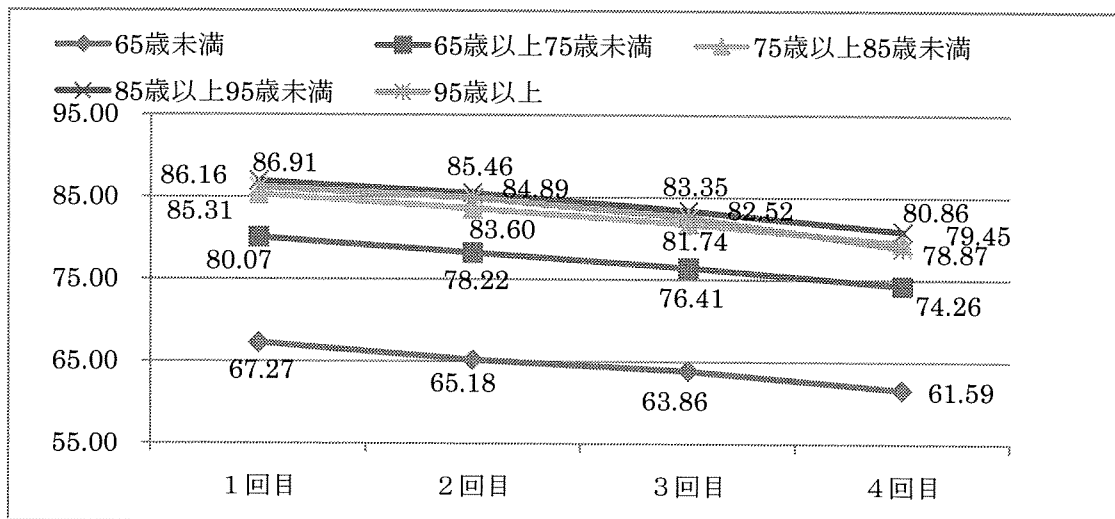


図 2-8 年齢階層別第1群(麻痺・拘縮等)の中間評価項目得点の経年的な変化

4) 男女別年齢階層別

① 男性

男女別年齢階層別に要介護高齢者における第1群（麻痺・拘縮等）の中間評価項目得点の比較した結果、男性においては、65歳未満の2回目から3回目、95歳以上の1回目から2回目にかけて、を除いて、すべての年齢階層において、回数を経るごとに点数が有意に低下していた。

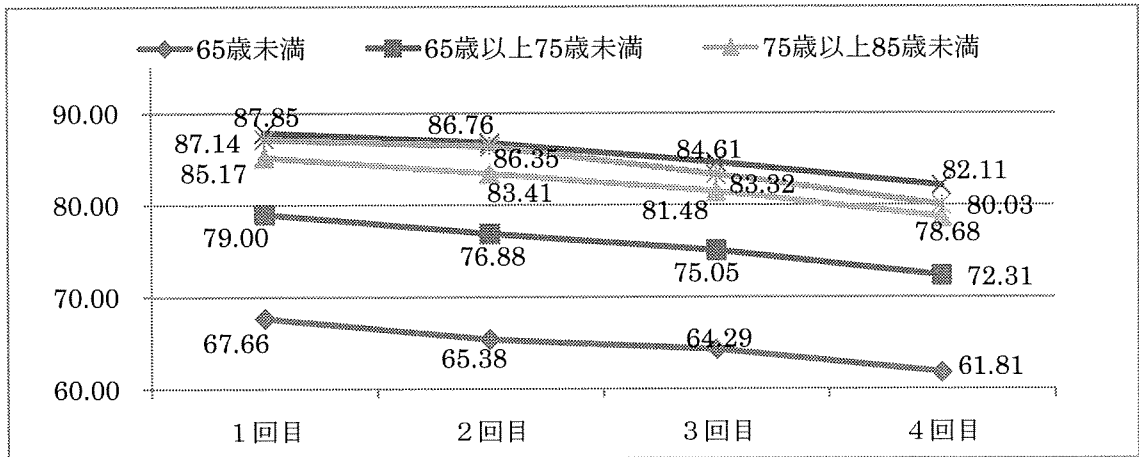


図 2-9 男性の年齢階層別第1群(麻痺・拘縮等)の中間評価項目得点の経年的な変化

② 女性

女性においては、年齢階層別に第1群（麻痺・拘縮等）の中間評価項目得点の経年的変化を見たところ、すべての年齢階層において1回目から4回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

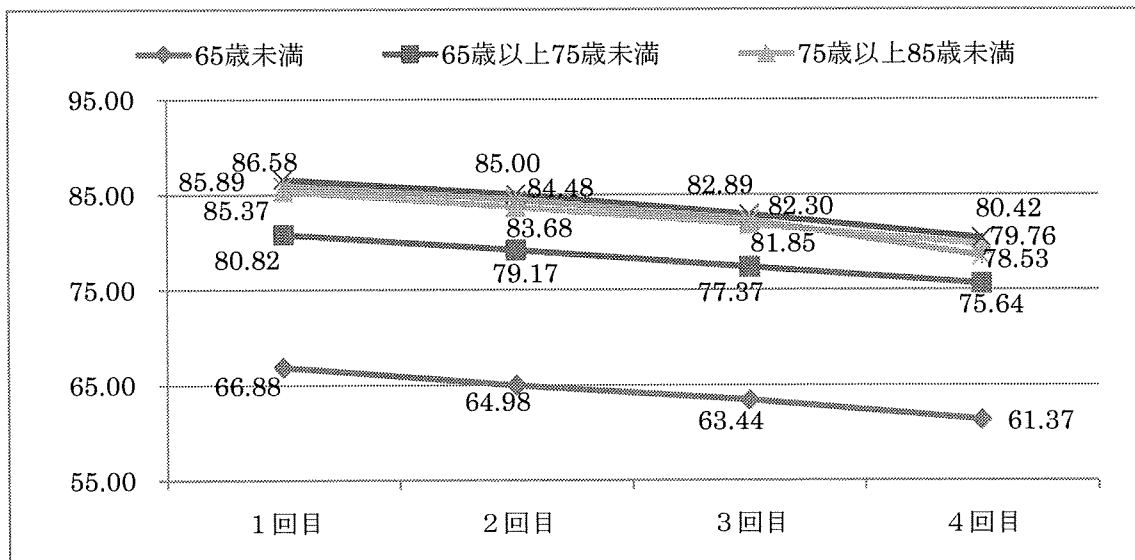


図 2-10 女性の年齢階層別第1群(麻痺・拘縮等)の中間評価項目得点の経年的な変化

2. 第2群（移動等関連）の中間評価項目得点の経年的変化

1) 調査対象者全体

調査した全要介護高齢者の第2群（移動等関連）の中間評価項目得点においては、1回目 79.90点、2回目 79.22点、3回目 74.89点、4回目 69.63点と回数を経るごとに得点が有意に低下する傾向があり、変動係数も大きくなっていった。

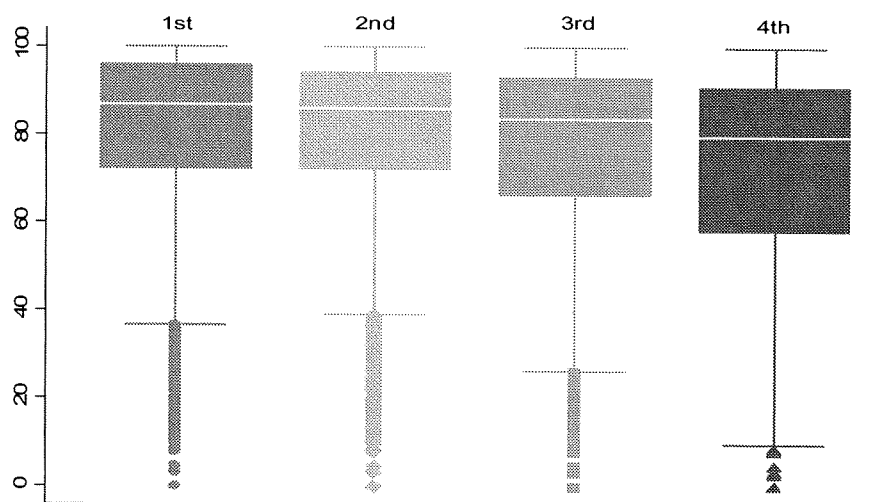


図 2-11 第2群（移動等関連）の中間評価項目得点の推移（ボックスチャート）男女別

第2群（移動等関連）の中間評価項目得点の男女別に比較した結果、男性は、1回目から2回目にかけて、有意差はなく、2回目以降は、有意に得点が低下する傾向にあった。女性においては、1回目から4回目まで得点が有意に低下する傾向にあった。また、得点の男女差については、1回目男性 79.49点に対し、女性 80.09点と女性のほうが有意に高く、4回目においても男性 68.52点、女性 70.13点と女性のほうが有意に高かったが、2回目および3回目については、有意差が見られなかった。

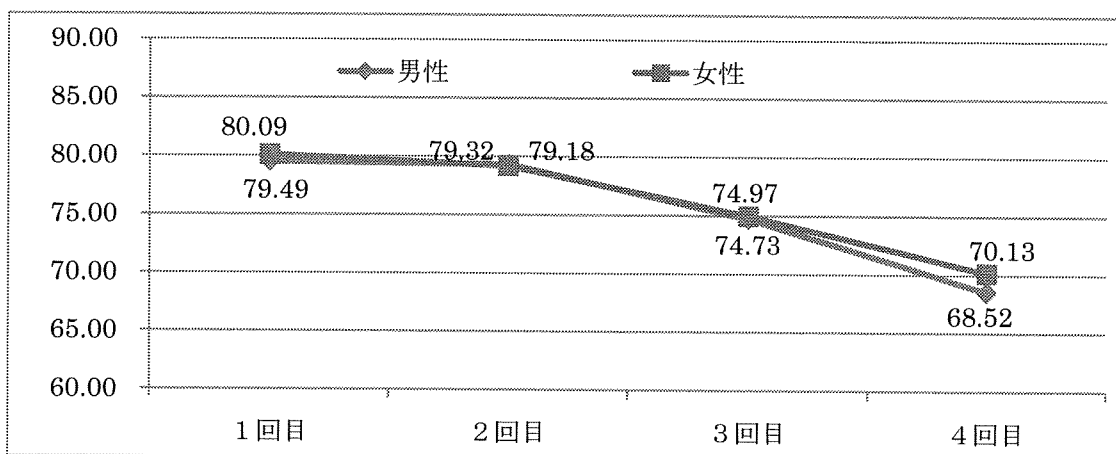


図 2-12 男女別第2群（移動等関連）の中間評価項目得点の経年的な変化

2) 年齢階層別

年齢階層別に要介護高齢者における第2群（移動等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、1回目から2回目にかけて65歳以上75歳未満および95歳以上については有意差が見られなかった。また、その他の1回目から2回目については、65歳未満は有意に得点が上昇していたが、75歳以上85歳未満および85歳以上95歳未満については、逆に低下していた。

その他の認定回数については、すべての年齢階層において1回目から4回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

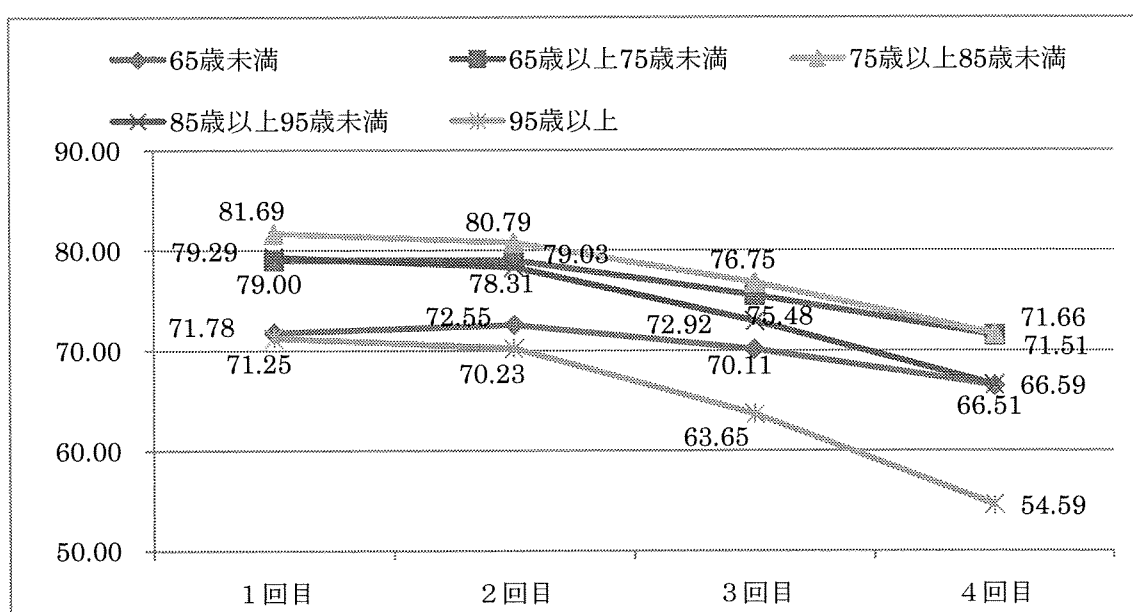


図 2-13 年齢階層別第2群（移動等関連）の中間評価項目得点の経年的な変化

3) 男女別年齢階層別

①男性

男女別年齢階層別に要介護高齢者における第2群（移動等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、男性においては、85歳以上95歳未満および95歳以上の1回目から2回目にかけては有意差はなかった。また、65歳未満と65歳以上75歳未満にかけてのみ、得点が有意に上昇していた。しかし、その他については、すべての年齢階層において1回目から4回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

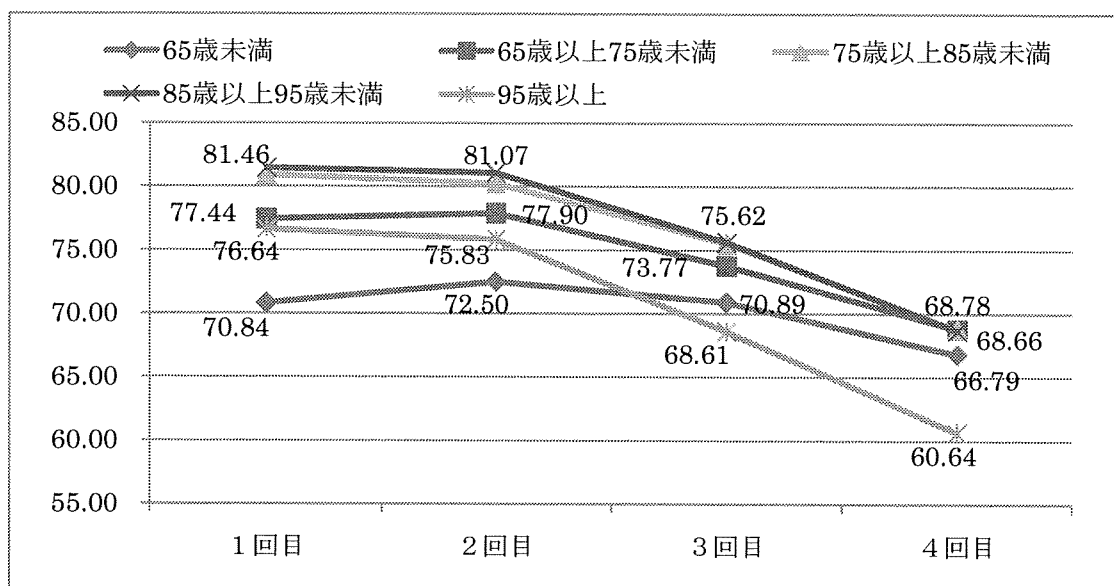


図 2-14 男性の年齢階層別第2群（移動等関連）の中間評価項目得点の経年的な変化

②女性

女性は、65歳未満、65歳以上75歳未満、95歳以上の1回目から2回目にかけては有意差はなかった。

男性では、85歳以上95歳未満の1回目から2回目にかけて、有意差は見られなかったが、女性においては有意に得点が低下していた。

その他は、すべての年齢階層において1回目から4回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

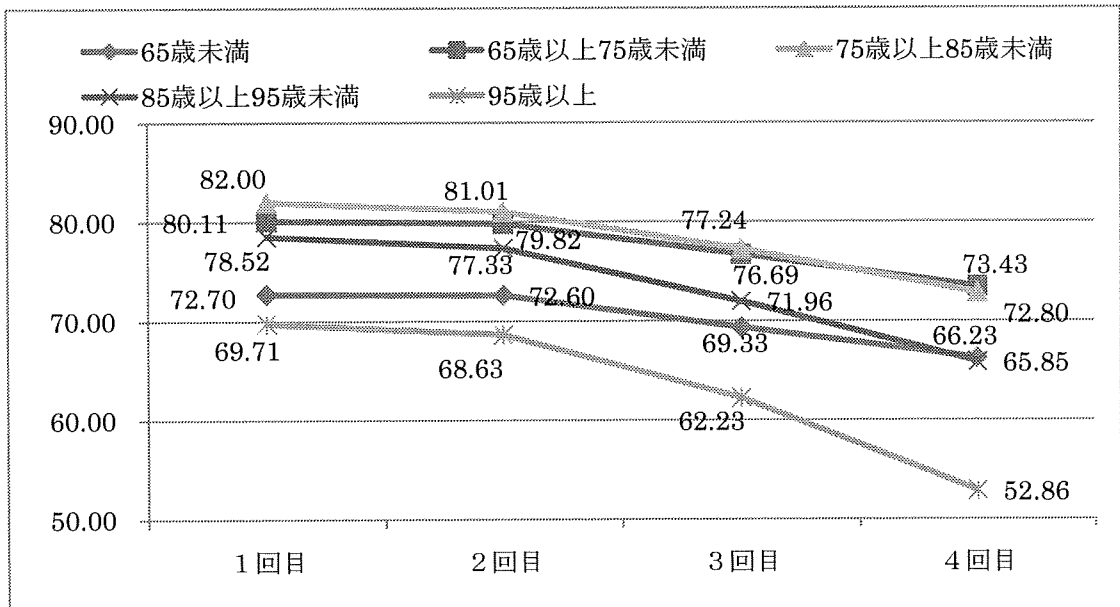


図 2-15 女性の年齢階層別第2群（移動等関連）の中間評価項目得点の経年的な変化

3. 第3群（複雑な動作等関連）の中間評価項目得点の経年的変化

1) 調査対象者全体

第3群（複雑な動作等関連）の中間評価項目得点は、1回目 58.13点、2回目 56.66点、3回目 51.89点、4回目 46.91点と回数を経るごとに点数が有意に低下していた。

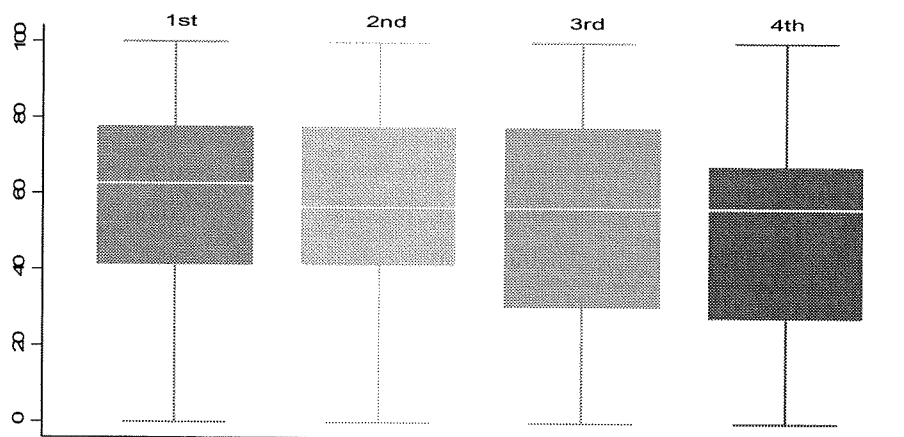


図 2-16 第3群（複雑な動作等関連）の中間評価項目得点の推移（ボックスチャート）

2) 男女別

男女別に要介護高齢者における第3群（複雑な動作等関連）の中間評価項目得点の比較した結果、男女ともに回数を経るごとに得点は有意に低下していた。また、いずれの認定回数においても、女性が男性より得点が有意に高い傾向が見られた。

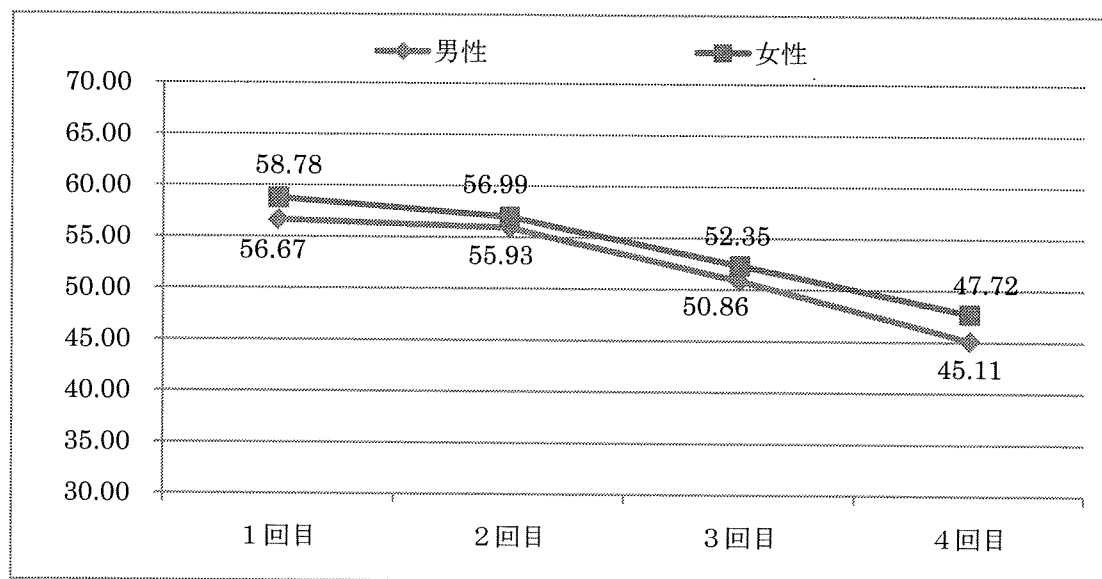


図 2-17 男女別第3群（複雑な動作等関連）の中間評価項目得点の経年的な変化

3) 年齢階層別

第3群（複雑な動作等関連）の中間評価項目得点を年齢階層別に比較した結果、65歳以上75歳未満の1回目から2回目には有意差は見られなかった。また、65歳未満の1回目から2回目にかけてのみ、得点が上昇していた。しかし、その他については、すべての年齢階層において1回目から4回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

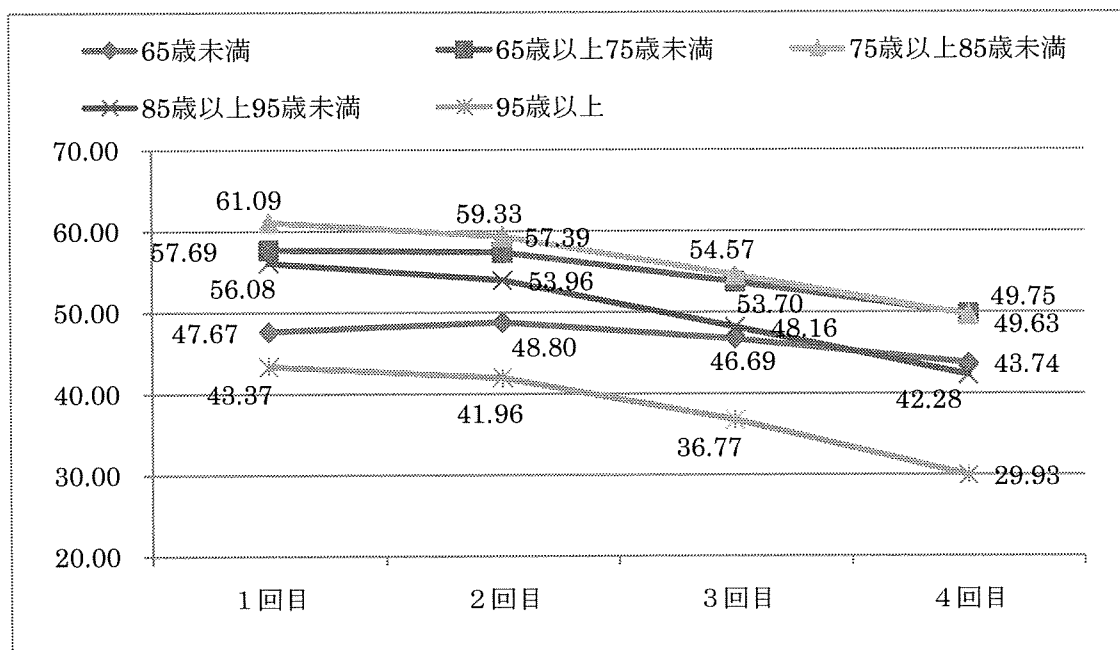


図 2-18 年齢階層別第3群（複雑な動作等関連）の中間評価項目得点の経年的な変化

4) 男女別年齢階層別

① 男性

男女別年齢階層別に要介護高齢者における第3群（複雑な動作等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、男性においては、全体の年齢階層別分析と同様の65歳以上75歳未満に有意差が見られず、

65歳未満の1回目から2回目にかけてのみ、得点が上昇していた。

男性は、95歳以上においても1回目から2回目には有意差は見られなかった。しかし、その他については、すべての年齢階層において1回目から4回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

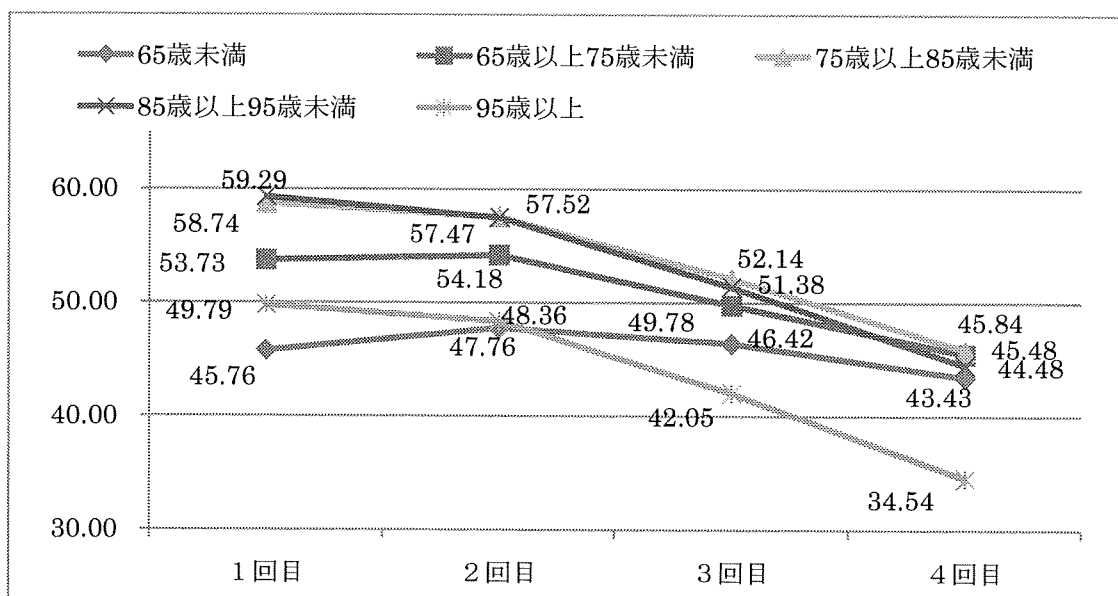


図 2-19 男性の年齢階層別第 3 群（複雑な動作等関連）の中間評価項目得点の経年的変化

② 女性

女性においては、65歳未満の1回目から2回目にかけてのみ有意差は見られなかった。しかし、その他については、すべての年齢階層において1回目から4回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

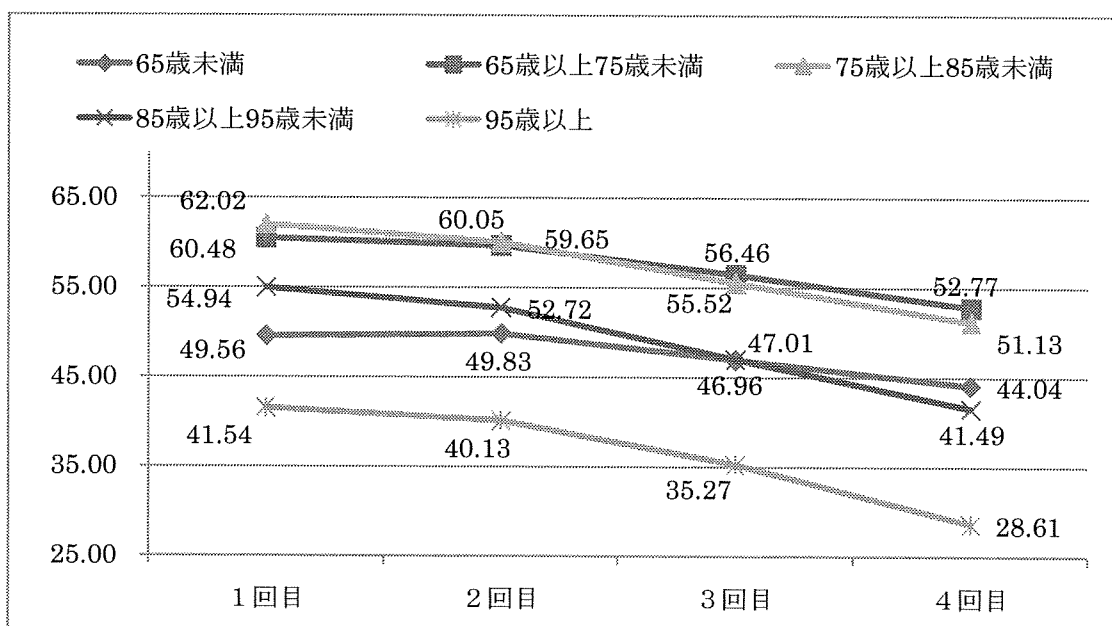


図 2-20 女性の年齢階層別第 3 群（複雑な動作等関連）の中間評価項目得点の経年的な変化

4. 第4群（特別な介護等関連）の中間評価項目得点の経年的変化

1) 調査対象者全体

要介護高齢者における第4群（特別な介護等関連）の中間評価項目得点は、1回目 91.64点、2回目 90.88点、3回目 87.62点、4回目 83.55点と回数を経るごとに点数が有意に低下していた。

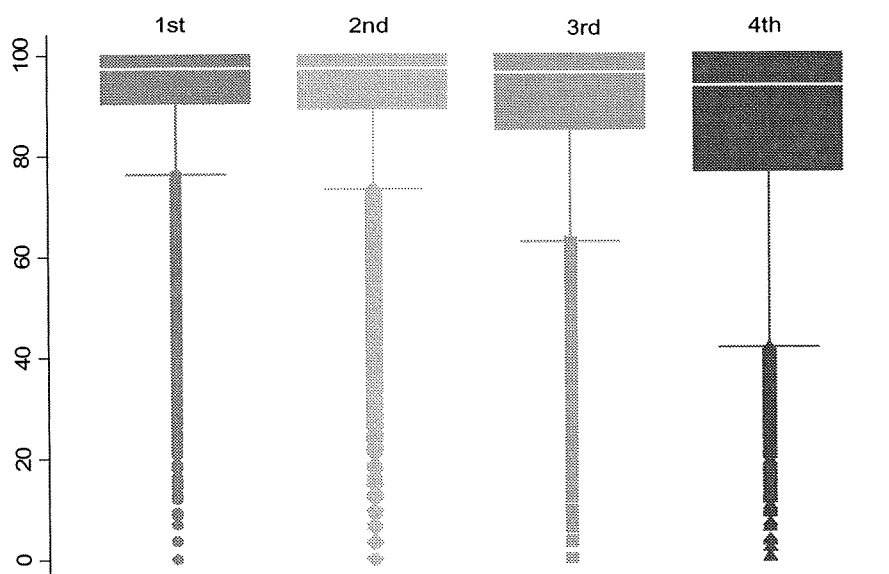


図 2-21 第4群（特別な介護等関連）の中間評価項目得点の推移（ボックスチャート）

2) 男女別

男女別に要介護高齢者における第4群（特別な介護等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、男女ともに回数を経るごとに得点は有意に低下していた。また、いずれの認定回数においても、女性が男性より得点が有意に高い傾向が見られた。

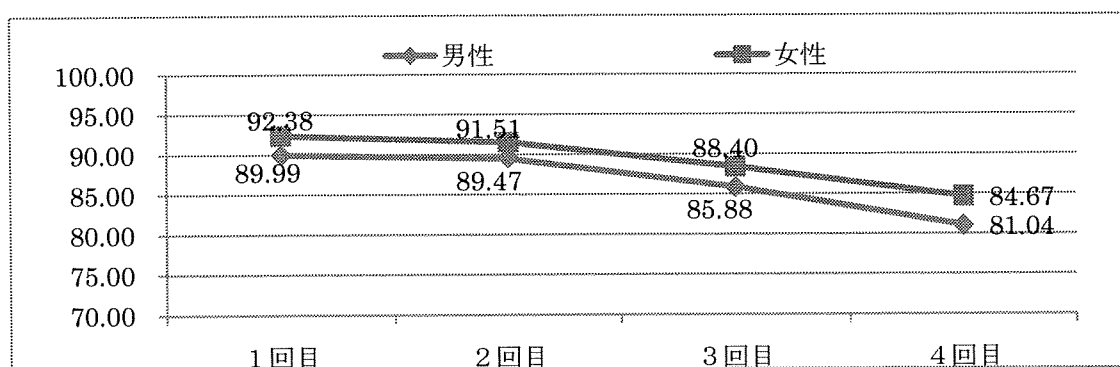


図 2-22 男女別第4群（特別な介護等関連）の中間評価項目得点の経年的変化

3) 年齢階層別

年齢階層別に要介護高齢者における第4群（特別な介護等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、1回目から2回目にかけて65歳未満では有意差は見られなかったが、その他の年齢階層については得点が有意に低下していた。

また、その他の認定回数については、すべての年齢階層において1回目から4回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

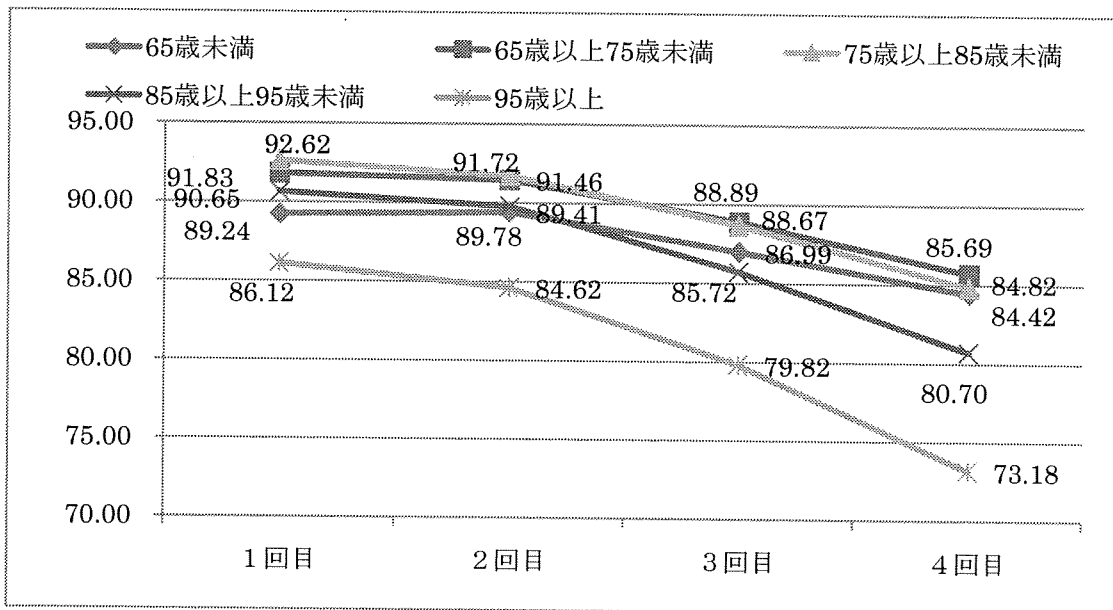


図 2-23 年齢階層別第4群（特別な介護等関連）の中間評価項目得点の経年的変化

4) 男女別年齢階層別

① 男性

男女別年齢階層別に要介護高齢者における第4群（特別な介護等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、男性は、1回目から2回目にかけて65歳以上75歳未満および95歳以上では有意差は見られなかったが、その他の年齢階層については得点が有意に低下していた。

また、その他の認定回数については、すべての年齢階層において1回目から4回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

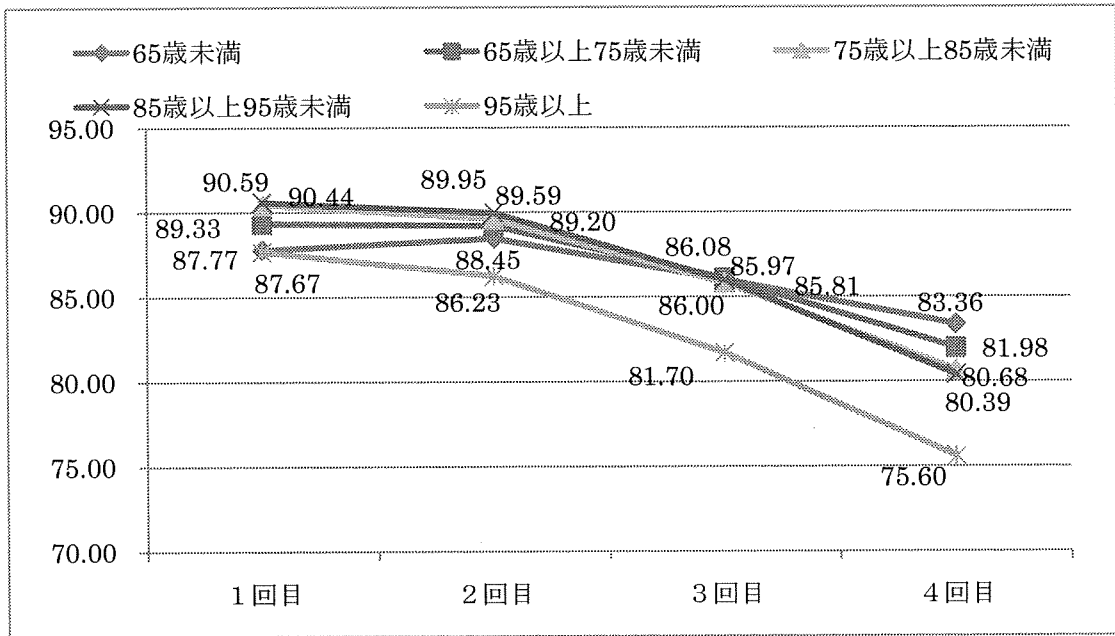


図 2-24 年齢階層別第 4 群 (特別な介護等関連) の中間評価項目得点の経年的変化 (男性)

② 女性

女性は、1 回目から 2 回目にかけて 65 歳以上 75 歳未満で有意差は見られなかったが、その他の年齢階層については得点が有意に低下していた。また、その他の認定回数については、すべての年齢階層において 1 回目から 4 回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

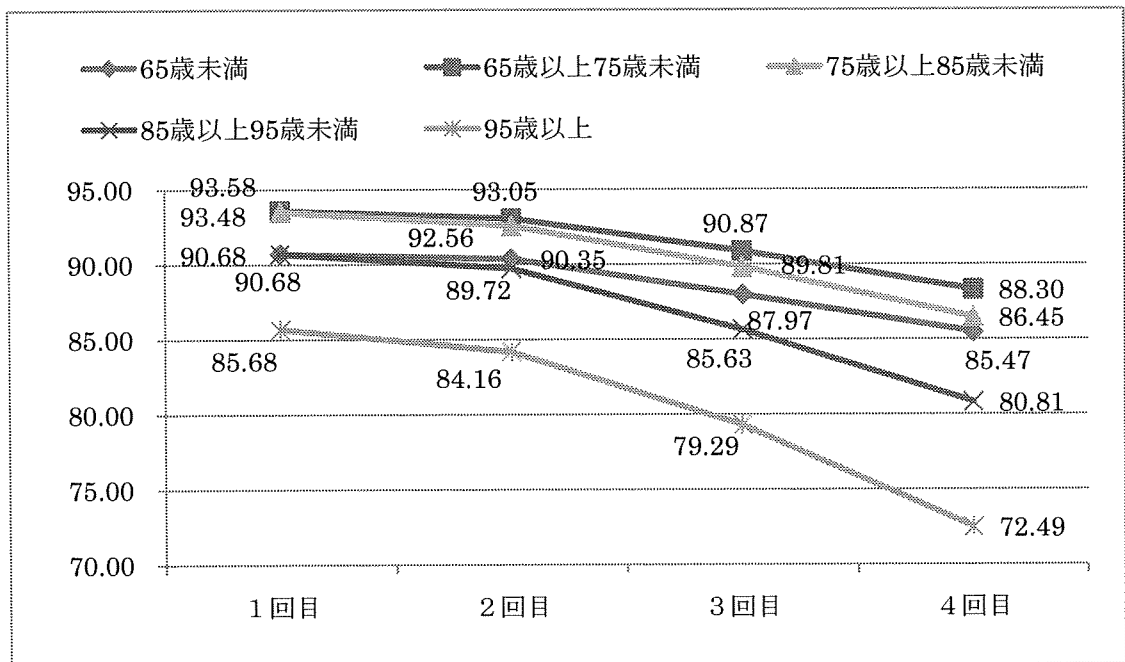


図 2-25 年齢階層別第 4 群 (特別な介護等関連) の中間評価項目得点の経年的変化 (女性)

第5群（身の回りの世話等関連）中間評価項目得点の経年的変化

1) 調査対象者全体

要介護高齢者における第5群（身の回りの世話等関連）の中間評価項目得点は、1回目 69.74点、2回目 56.63点、3回目 62.00点、4回目 67.40点と回数を経るごとに点数が有意に低下していた。

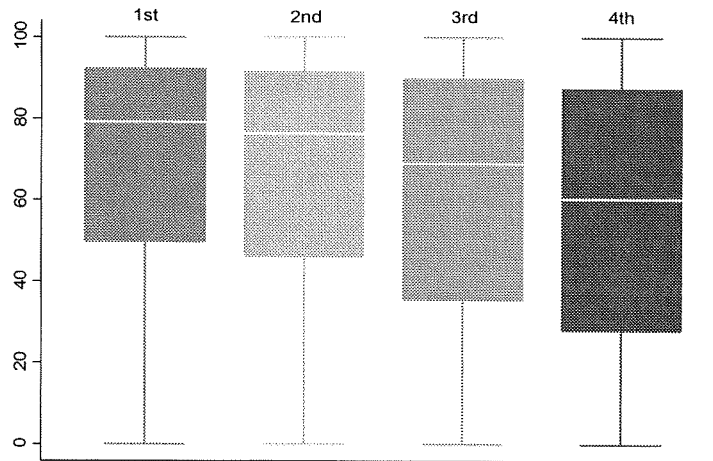


図 2-26 第5群（身の回りの世話等関連）の中間評価項目得点の推移（ボックスチャート）

2) 男女別

男女別に要介護高齢者における第5群（身の回りの世話等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、男女ともに回数を経るごとに得点は有意に低下していた。また、いずれの認定回数においても、女性が男性より得点が有意に高い傾向が見られた。

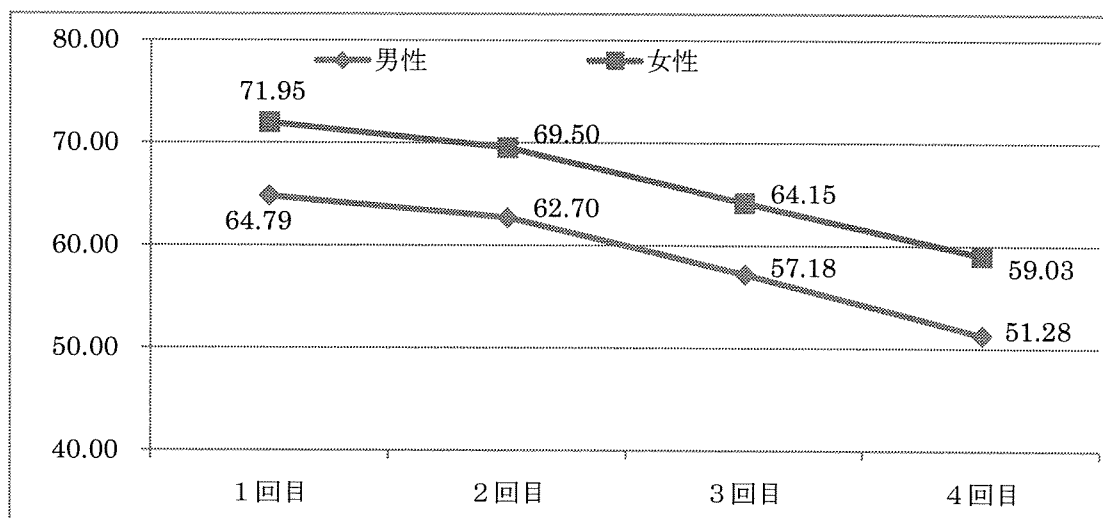


図 2-27 男女別第5群（身の回りの世話等関連）の中間評価項目得点の経年的変化

3) 年齢階層別

年齢階層別に要介護高齢者における第5群（身の回りの世話等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、65歳未満の1回目から2回目を除き、すべての認定回数すべての年齢階層において1回目から4回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。

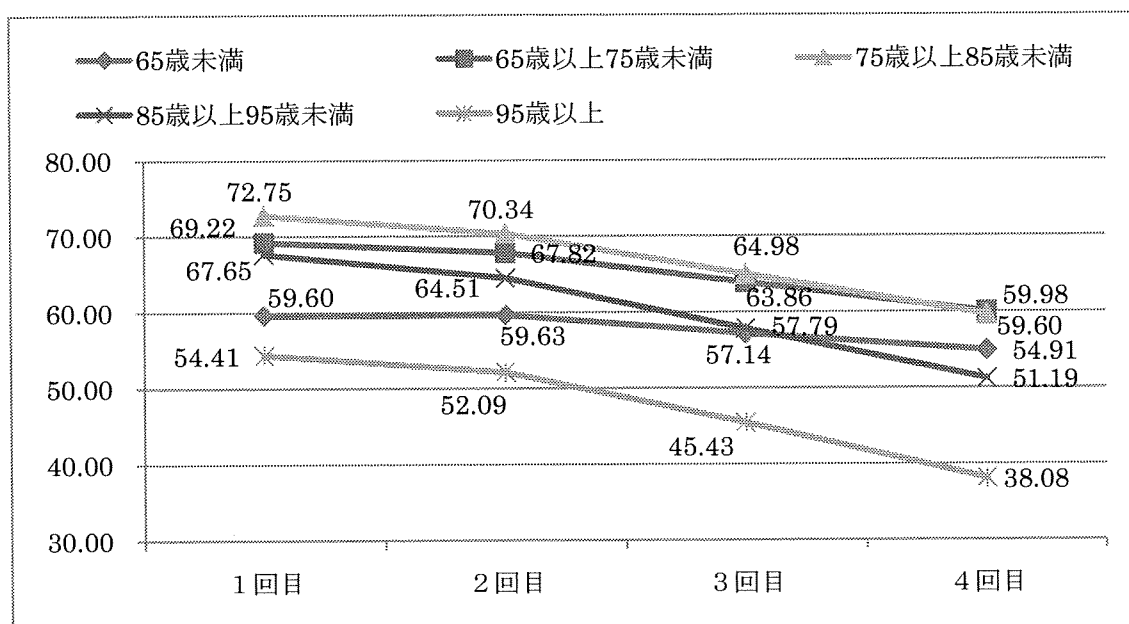


図 2-28 年齢階層別第5群（身の回りの世話等関連）の中間評価項目得点の経年的変化

4) 男女別年齢別階層別

① 男性

男女別年齢階層別に要介護高齢者における第5群（身の回りの世話等関連）の中間評価項目得点を比較した結果、男性においては、65歳未満に加えて95歳以上においても1回目から2回目において有意差はなかった。その他は、全体の年齢階層別分析と同様、すべての認定回数すべての年齢階層において1回目から4回目にかけて、回数を経るごとに有意に得点が低下していた。